

武井利喜・さとうわきこと「小さな絵本美術館」

田中 愛

「小さな絵本美術館」は、絵本作家さとうわきこを主宰とし、夫の武井利喜を館長として、1990年11月3日に長野県岡谷市のりんご園の中に誕生した。スポンサーを持たぬ個人運営ながら、1997年には原村に八ヶ岳館もオープンし、国内外のすぐれた絵本原画や作品を紹介してきた。また、絵本に関する講座や海外ツアーなどの企画、お泊り美術館やよもぎだんごづくりなど子どもたちと関わる行事も行いつつ、現在まで活動を続けている。

別稿^(注1)で、絵本作家さとうわきこが誕生し、結婚によって長野県岡谷市に移り住むまでを述べたが、この稿では、さとうわきこと武井利喜の美術館活動をたどり、その特色についてまとめた。

武井利喜

わきこの夫であり「小さな絵本美術館」の館長となった武井利喜は、1951年に諏訪湖にほど近い岡谷市長地に生まれた。家は林檎を中心に栽培する農家であった。周囲には静かな田んぼと果樹園が広がっており、諏訪湖に注ぐ近くの川にはフナやドジョウがたくさんいて、ホタルも舞う農村だったという。わきこが練馬区大泉の自然のなかで存分に遊び、その美しい自然を原風景としたように、武井も「少なからず、自然と遊び、自然からの贈りものをもらって過ごした少年時代が、私のもとを作っています」^(注2)と述べている。自然と深く関わり自由に遊んだ幼い頃の体験は、絵本に携わる者にとっての大切な資質を育んだと思われる。

わきこは若くして腎臓結核を患っているが、奇しくも武井も、高校1年生のとき腎臓を病み、入院そして療養生活を送ることになる。もともと活発で負け

ず嫌いな性格で、勉学にも励んでいただけに、挫折感や自分だけが取り残されたような気持ちを抱いたという。ちょうどその頃、友達に誘われて、東京の丸善書店で行われていた「世界の絵本展」を見に行く機会があった。その時の体験が武井の人生の方向性を変える契機となった。「そこで、心を打たれた、絵本の世界に興味を持ちました。感動に近い思いだった」(注3)と述べている。

谷川さんの絵本(『木』至光社)に「まけないで」って詩があったりしてさ。

堀文子さんの絵で、風に揺られている木なんか見て…。病気で感傷的になっているでしょ。それでそういう絵本の世界に自然と入っていったのかな。(注4) 思いがけず、絵本によって武井の心は癒され、勇気づけられたのであった。さらに、展示されていた世界の絵本の美しさに心を奪われ、絵本を集めるようになったという。

高校は卒業したが、「普通に大学に通ってレールに敷かれた人生を歩むといった価値観をもたなくなってしまった」(注5) 武井は、子どもたちのための常設の劇場を岡谷につくりたいと考え、上京して劇団に入り演出の勉強を始めた。一方、古書店を回りヨーロッパの古い絵本を探したり、アルバイト先の福音館書店の図書室で多くの絵本を借り出して読んだり、絵本への関心は止むことがなかった。(図書室の貸し出しカードに「武井」の名前がたくさんあるのを見て、編集者から代表取締役社長になっていた松居直も、どんな人物なのか気にかけていたという)しかし、母親が病を得て、1年も経たずして岡谷にもどることになる。帰郷して感じたのは、東京に比べ、地元の子どもたちは、子どもの本に関する情報量も絵本に出会うきっかけも少ないということだった。そこで、仲間たちと世界各国の絵本を選び、公民館などで国別に展示する企画を行った。福音館の図書室からも借り出して7～8回は行ったという。そこで子どもたちとも交流を持つようになった。絵本の展示、子どもとの関わりという面で、この活動が「小さな絵本美術館」の前身とっていいだろう。

子どもたちとのやりとりを大変面白く感じた武井は、25歳の頃、自宅のりんご園の中にあつた小屋を改装し、地域文庫を始めた。この文庫の名前を「鬼

のみちくさ子ども文庫」という。鬼は悪い、怖いものばかりではない、子どもと遊ぶような楽しい鬼とみちくさをする場所、という意味で名付けたという。絵本を貸し出したり、読み聞かせやお話をしたりなど、この活動は公民館での活動も含めると10年以上続いた。

瀬田貞二との出会い

たびたび上京して古書展や古本屋をめぐったり、自宅での文庫活動を続けていく中で、武井は児童文学の大御所や編集者、絵本作家などと交流を深めるようになったという。ことに、福音館でのアルバイト時代に知り合い、師匠と仰いだのが瀬田貞二である。戦後日本の児童文学をけん引した最も重要な指導的人物のひとりであり、平凡社勤務時代に出版した『児童百科事典』やホフマンの『おおかみと七ひきのこやぎ』『ホビットの冒険』『指輪物語』等の訳業でも知られる。

瀬田がヨーロッパをめぐり、絵や古書を収集して帰ってきた際、絵本作家や編集者など10名余りが集まり話を聞く会があった。当時、福音館でアルバイトをしていた武井は、瀬田の家での集まりに一般人でただひとり参加することができたという。まだ20代前半であった武井は、瀬田の話や絵本の古書などに深く魅了され、ますます絵本への関心を深めていくことになった。以後も、古書店の内覧や福音館の図書室などで何度となく会う機会があり、武井が古書を集めていることを知った瀬田が、どのようなものを集めたらいいかをアドバイスもしてくれたという。

昭和54年に瀬田が63歳で亡くなった際、『旅の仲間 瀬田貞二追悼文集』（1980年 追悼文集編集委員会編 非売品）が出されたが、俳人の中村草田男、福音館書店の松居直、児童文学者石井桃子や松岡享子ら錚々たる関係者に交じて、28歳だった武井も追悼文を寄せている。その中に、

私みたいに、何もわからず、子どもと子どもの本の周辺で、まごまごしているものにまで、瀬田さんは何のきどりもなく楽しい話を聞かせてくれた。

あの独特としかいいようのない静かな笑顔で、穏やかな目は、ほんものをしっかりで見さだめていて、時に、三、四冊の絵本をだしてきては、話してくれる。瀬田さんのお話がつくと、平面だけだった絵本が、まさに息づいて、走りだすのだ。(略)何か絵本というものは、瀬田さんによって命を与えられる、そんな気さえおこってくる。

という文章がある。絵本の持つ深い魅力に気付かせ、あるいは若い武井がまだ言葉にできずにいながら感じ取っていたすばらしさを、瀬田は熱意をもって、上質な言葉で語ってくれたのであろう。

この追悼文には、古本を集めていたふたりが、トランプのめくり(引いたトランプの札の数が多い方が手に入れることができるという方法)で、ババールの『新婚旅行』の初版本などを競ったこと、瀬田が家族と岡谷の鬼のみちくさ文庫を訪ねてくれた思い出などが書かれており、武井が瀬田との交流に大きな楽しみと喜びを抱いていたことがうかがわれる。のちのち、美術館運営で大変なことがあっても、瀬田との心躍る思い出があることで続けて来られたと武井は語る。また、困難なことがあると「瀬田さんならどうするだろう」と考えてきたという。亡くなってなお、瀬田は折に触れ思い出される偉大な存在であった。

瀬田との出会いはまた、「小さな絵本美術館」の性格を方向づけることにもつながっている。

今の絵本のもととなる本は19世紀の後半にイギリスからはじまった。その当時の絵本を、瀬田さんと一緒に見たり集めたりしました。でもそれを私蔵するのではなく、いろんな人に見てもらいたいと思いましたね。でも、そんな数多くの子どもたちに夢を与えてきた絵本も、時代とともに忘れ去られてしまって、それはこういう社会だからなのかもしれませんが、全然顧みられない…。特に日本の場合はその傾向が強いですね。(略)一回出せばそれで終わりというような風潮がありました。でも、そうさせてはいけない—という思いが強くなっていきました…(注6)

「びじゅつかんだより」の中で、わきこも「先人の作品が、すばらしい作品で

あるのにもかかわらず、何故か忘れられそうな存在になりつつあるのが多い。
(略) 当初の美術館開催の目的の一つに、そういった先人の作品に光をあてる、
という目的があった」(注7)と述べている。瀬田との出会いによって、時代の流
れの中に置き忘れられそうになっているすぐれた（そしてふたりが好きな）作
家に光を当てることが、美術館の性格のひとつとなるのである。

瀬田のほかにも、武井は光吉夏弥、石井桃子、渡辺茂男など、子どもの本に
関するすぐれた人たちと出会い、さらに絵本好き、古本好きが高じていった。
スイスの児童書編集者であったベッティーナ・ヒューリマンの「おとなのくせ
に本気で、あるいはたのしみに子どもの本とつきあっている人々は、いつかど
こかでみんな知り合うものだ」という言葉通りの日々であったと武井は振り返
っている。そして、このヒューリマンの言葉のように、子どもの本が好きな人々
が知り合う場として、美術館を開館したいと願ったのであった。

「小さな絵本美術館」の誕生

「鬼のみちくさ文庫」は、わきこと結婚したころ、母の病も重くなっていた
ため閉じることになる。母が亡くなったのはそれから2年もしないうちであっ
た。ショックを受けた父親を元気づけるため、武井とわきこは海外旅行を計画
し、父を連れてヨーロッパに出かけた。これを契機に、ふたりはイギリスやフ
ランス・スイスなどに行くようになった。友人も誘い、ケネス・グレアムの『た
のしい川べ』などの児童文学や絵本の舞台になった場所へ、自らツアーを組ん
で出かけていたという。

この時期、飛行機が落ちる不安もあり、わきこの絵本原画（ばばあちゃん
シリーズの「あめふり」「どろんこおそうじ」「よもぎだんご」「たいへんなひ
るね」など、精力的に創作していた時期にあたる）や武井の集めた絵本の古書
など、皆に見られるようにといった遺書のようなものを書いて出かけていたと
いうが、それを知ったわきこの友人から「死んでからやるより生きているうち
にやった方が良い」と言われたという。武井はもともと集めたものを広く見て

もらいたいという思いがあり、また、先のベッティーナ・ヒューリマンの言葉通り「絵本を通じていろんな人と交流し、また絵本の楽しさが共有できる場を創りたい」(注8)と望んでいた。そこで、1990年に美術館の開館に踏み切ったのであった。

開館前は、小さな展示室があつて、お客さんが来たら呼び鈴を押してもらい、仕事の合間に出ていって開けるような美術館をイメージしていたという。素朴な美術館のつもりで、名前も「小さな絵本美術館」とした。

開館当初のリーフレット、そしてホームページには、以下のような武井の文章がある。

この流れのはやい時代において心躍る絵本や、心にしみいる話に出合うことは、子どもにとってどんなに豊かなことでしょう。この美術館が多くの子どもの空想の世界をひろげるお手伝いをするとともに、私たち大人にもわれを忘れて夢中にさせる絵本の世界を提供できたらどんなにか楽しい事かと思ひます。

絵本は子どもにとって、そして大人にとっても、豊かな時間を与えるすばらしいものであることを、武井は美術館を通して伝えようとしている。

一方、わきこは、

私は作家の立場でね、挿絵画家は画家の中では非常に低い位置にあると思つたんですよ。武井武雄さんなんかもあるし、小さい子どもに関わるととても大切な仕事なのに。だから美術館をすることによって市民権みたいなものを、自分も仲間も持てたらいいな、と…(略)それともう一つは、私が東京から田舎に来ちゃつたんで原画を見る機会がないでしょ。自分のところに美術館があれば、他の人の絵を借りてこられると思った。(略)勉強したかつたんですね。すごく参考になりましたよ、確かにね。(注9)

と、創作者としての立場から、開館の目的を述べている。日本児童出版美術家連盟に若いころから所属し、画家の著作権を守るための運動に与していたわきこであったが、「小さな絵本美術館」は、芸術的な作品として絵本原画を扱い、

丁寧に展示し世の中に紹介するという先駆けとなったのである。さらに、多くのすぐれた作品を見ることで刺激を受けたり、視野が広がるなど、わきこの創作活動にもよい影響を与えたようである。

「小さな絵本美術館」最初の展示は、北川民次の『うさぎのみみはなぜながい』という、1962年に福音館書店から出されたリトグラフの絵本の原画だった。わきこは「描き分けた白黒の三版がそれぞれ残っていて、私、その頃リトグラフにすごく興味があって、リトの絵本を見たかったのね。」^(注10)と述べている。「見る人には、ちょっと難しい」^(注11)とわかっていながらも、展示するのは自分たちが見たいものというポリシーを、現在に至るまでふたりは貫いている。

翌91年、最初の展示はスズキコージの『サルビルサ』^(注12)の原画展で、さらに夏にスズキコージ・片山健の二人展を行っている。このふたりに関しては、美術館で何度も企画展を行っており、ギャラリートークやワークショップ、絵本講座（91年からほぼ毎年秋に八ヶ岳等で1泊2日で行われている）の講師として招くなど、現在まで「小さな絵本美術館」に深い関わりを持つ作家である。

まだ開館する前に、武井とわきこは美術館に飾る絵を購入したいと思っており、ふたりともが好きな作家であった片山健の展覧会に出かけ、「水蜜桃」というタイトルの大ぶりの絵（80cm×66cm）を思い切って購入した。この絵は現在も岡谷館に展示されている。同じくふたりが好きな作家であったスズキコージであるが、やはり開館前に、絵を購入するためアトリエを訪ねたという。岡谷館にはスズキコージの大作「難民トラック」（400cm×180cm）、「ジプシー」「ラストマン・バイブレーション」「飛ぶ仲間」などが同じく飾られている。

ある時、スズキコージから、ハンガリーのケチケメイトのナイーブ・アート美術館館長バーンスキー・パール氏に会うことを勧められ、93年1月に武井とわきこはハンガリーに飛ぶ。冬の休館中にもかかわらず開けてもらったナイーブ・アートの美術館で、「日本の昔を思い出すような、まだ物の溢れる前の

時代に村で畑を作ったり子育てしながら作り上げられた、素朴であたたかく、しかもウィットに富み命の叫びさえ感じられる」(注13) 絵や彫刻を見て、ふたりとも強く引き付けられた。開発前の故郷の自然に強いノスタルジーを抱くふたりであれば、「私達日本人が、今の繁栄の代償として失くしてしまったか、あるいは深層にしまい込んでしまった大切なものが、そこにある」(注14) と感じ、絵本ではなくとも、自分たちの美術館で紹介したいと強く願ったのであった。

94年11月に「小さな絵本美術館」で初の海外の特集展示「ハンガリーのナイーブ・アート展」を行うことができるまで、準備として5回ハンガリーに足を運んでいるが、その間「人の心から湧き出た手づくりの作品を心から大切に未来にわたそうと願い行動しているケチケメイトの友人たち」(注15) と交流し、作品が生まれてきた風土を四季折々に見ることになった。これによってふたりは、作品をより深くとらえ理解することができたのであった。

直接何度も足を運び、関係者とコミュニケーションをとって信頼を得、また作品の生まれた土地を歩き見聞きしてくるというやり方は、小回りのきく個人美術館であるがゆえに可能なことであろう。以後、ふたりはこの方法で、自分たちの好きな優れた作品を「小さな絵本美術館」で紹介することになる。

95年は開館5周年にあたり、特別展示として「八島太郎展」を開催した。八島太郎は、昭和14年に絵の勉強のためニューヨークに渡り、戦後はイラストレーターとして活躍したが、1950年代になると絵本の創作も手掛け、『Crow Boy』などがアメリカで高い評価を得た作家である。武井は東京で古書店巡りをしていた時八島の絵本に出会い、以後大切な作家となっていた。

東京に出て、古書店を廻っていたとき、八島太郎の「Crow Boy」と「Village Tree」に出会いました。2冊とも、私の少年時代の思い出とだぶって、自分が生き生きと自然を相手に遊んでいた当時を呼び覚ましてくれました。そして、その八島太郎の絵本は、私にとって貴重な本となりました。(注16)

八島太郎は、いつかは展覧会を行いたいと思っていた作家だった。八島の息子はアメリカで俳優をしているマコ岩松で、父の一周忌をかねて日本で遺作展

をするために帰国していたところ、神戸で阪神淡路大震災に遭ったという。その小さな新聞記事をたまたま見つけたふたりは、千載一遇の機会として、つてをたどってマコ岩松氏に会い、八島太郎展の開催にこぎつけたのだった。

武井は「びじゅつかんだより」の中で『あまがさ』のぼん ぼろ ぼん ぼろ ぼんぼろ ぼんぼろ・・・が、何ともやさしく心に響き、『村の樹』は、感受性豊かな少年時代の大切な思いを呼び起こし、『からすたろう』は、人としての根幹に強くせまります。いじめが問題になる現在八島太郎の作品からは生きることの意味を鮮明に問いかけ、やさしい気持ちを思い起こさせてくれます」(注17)と称賛の言葉を寄せており、わきこはすぐれた作品であるにもかかわらず忘れられそうになっている作家のひとりとして「これを機会に、八島太郎をもっと多くの人に知ってもらいたい」(注18)と述べている。

この年、年間入館者数が1万人を超え、八島太郎展を多くの人に見てもらえたことを喜んだが、美術館経営の困難さは常にあったことが「びじゅつかんだより」からうかがえる。(注19) 運営に苦心しながらも、絵本に親しむ人によりよい環境を提供しようと、97年には、原村にハケ岳館を開館する。

「小さな絵本美術館」のパンフレットには以下の文章がある。

小さな町でも開発の波がおしよせ、どんどん姿を変えてきています。時代は、子どもたちにさえ、自由な時間を過ごすことを難しくさせています。そこで、もっと気持ち良い環境の中で、子どもたちや大人たちに豊かで楽しい絵本の世界に触れ、ゆったりした時間を過ごしてもらいたい。そんな気持ちから、この小川が流れる美しい白樺林の中に、もうひとつの美術館を建てました。

ハケ岳館は、1650坪の敷地に500坪の自然公園を含むという。白樺をはじめとする木々に囲まれたこの美術館は、3つの展示室に絵本の図書室、販売コーナーとカフェスペースを含み、屋外にはバーベキューのできる小屋もあるすばらしい施設である。

ハケ岳館を増設するにあたり、武井はインタビューに応じて「自然のなかで

子どもたちの夢を育てなければと思っています。」^(注20)とも述べており、絵本の紹介や展示に加えて、「夏のお泊り美術館」を企画し、この敷地を使って子どもたちが闇の中を歩いたり、ドラム缶のお風呂に入ったり、木に登ったりといった現代ではなかなかできない自然の体験を盛り込んだイベントを、2003年から毎年行っている。

フェリクス・ホフマンとハンス・フィッシャー

「小さな絵本美術館」の特筆すべき企画として、『おおかみと七ひきのこやぎ』等で有名な絵本作家フェリクス・ホフマン、そして『こねこのぴっち』や『たんじょうび』の作者ハンス・フィッシャーの展覧会がある。ともにスイスの絵本作家で、日本初となる原画展であった。遺族との交流・交渉によって紹介できる作品や資料が増えるに伴い、何度か企画展が行われ、その後、銀座の教文館^(注21)など全国数か所を巡回し、多くの人の目にするところとなった。

ホフマンもフィッシャーも、100年以上前に生まれた絵本作家であり、その絵本はすでに古典の部類に入る。ファンはいるものの、一般受けするような類の絵ではないと言ってよいだろう。しかし、武井もわきこも、それぞれ若い頃から好んだ作家であった。20代ですでにホフマンの絵が好きだったというわきこは、『おおかみと七ひきのこやぎ』の初版本（1967年 福音館書店）を購入しており、武井もリト刷りの古書を持っていたという。

いつかホフマン展を行いたいと思っていたふたりは、彼の最後の絵本『クリスマスのものがたり』の原画がまだ出版元の福音館に残っていることを知る。（これは松居直がホフマンに直々に依頼して実現した絵本で、1975年10月に出版された。ホフマンはその年の6月に亡くなっている。）そこでこの原画に加え、『おおかみと七ひきのこやぎ』の原画を遺族から借りて企画展をできないだろうかと考え、福音館でホフマンの担当であった編集者の紹介でホフマン夫人に連絡をとり、1996年の2月14日にスイスのアーラウに住む夫人のグレーテルを訪ねた。

その日は三女のスザンヌもふたりを迎えてくれ、彼女が父から贈られた『おおかみと七ひきのこやぎ』の手描き絵本を見せてくれた。さらには、長女、次女、長男にそれぞれ贈られた『ながいかみのラプンツェル』『ねむりひめ』『七羽のからす』の手描き絵本も借りてきてあったという。これらの本はもともと出版する目的で作られたものではなく、愛する子どもたち一人ひとりに、ホフマンが描き与えたものであった。(のちに、出版社の勧めにより、この手描き絵本をもとに現在見られる形の絵本として出版される。) これらの手描き絵本も借りて、日本で展覧会をさせてもらうことはできないかと尋ねたところ、スザンヌはその場で「自分の命から二番目に大事」(注22)という本を貸すことを承諾してくれ、夫人もほかの子どもたちに聞いてみると言ってくれた。そして6月に再び訪れると、すべて貸し出すという返事をもらえたのであった。スイスではグリムの話は売れない時代で、ホフマンが亡くなった際、市の博物館に夫人が預けた作品—『くまおとこ』の手作り本やリトの下絵など—が、20年経ってもひものかかったままそっくり手つかずで保存されている状態であったという。そのような時、熱心なファンでもあるふたりが夫の仕事を評価し、日本で紹介したいとはるばる訪ねてきたことは、遺族にはとてもうれしいことだったにちがいない。ホフマン家から念願の作品を借りて「フェリクス・ホフマン展」が実現したのは、1996年10月のことであった。

その後、何度もホフマン夫人を訪ねるうちに、絵本の中に登場する建物や、ホフマンが手がけた壁画・ステンドグラスのある教会、学校などを案内してもらったり、未整理の資料を自由に見せてもらえるようになり、絵本以外の広範なホフマンの仕事を知るようになる。また、夫人は博物館から夫の資料を引き上げ、ふたりはさらに多くの作品やスケッチなどを見ることが出来たのであった。わきこは「ダミー、下絵、スケッチと、一つの作品を作る前の作業が、私などの考えも及ばないほどの慎重さで、繰り返し作られ、しかもそれが彼自身の手できちんと整理され仕分けされていたことを知ったおどろきは、同じ絵本作家として、ホフマン氏を以前にもまして身近な存在としてとらえさせた」(注23)と、創作者

の立場からホフマンの仕事に刺激を受けたことを述べている。

これら新しい資料をまた日本で展示すべく、98年9月11日から「フェリクス・ホフマン展～父から子への贈りもの～絵本 版画 壁画 ステンドグラス」と題して、ホフマンの仕事幅広く紹介することになる。さらに、スイスからホフマン夫人と三女スザンヌが来日し、企画展開催直後の9月26日、八ヶ岳館近くの八ヶ岳自然文化園を会場に「ホフマン夫人を囲む会」が行われた。松居直の講演、夫人のグレーテルによる「夫・フェリクス・ホフマンを語る」、そしてグレーテルとスザンヌ、武井とわきことの対談「ホフマンさんの仕事について」といった内容であった。さらに、2002年4月のホフマン展に合わせ、今度は長女ザビーネと次女クリスティアーネを迎えて「ホフマンを語る」会を主催し、没後発見されたホフマンの日記についての話や、二人の娘の思い出などを聞いている。

ホフマン家の人達との交流の中で知ったホフマンとその作品について、図録にとどまらず、武井とわきこで編集・構成を行った『父から子への贈りもの フェリクス・ホフマンの世界』という大判の本も「小さな絵本美術館」から出版された。^(注24) また、2000年には、ホフマン夫人が読み聞かせしてくれた思い出のある^(注25)『ヨッケリなしをとつといで』も出している。

さらには、武井の発見によって、それまで知られることのなかった『赤ずきん』が日本で出版される運びとなった。

2000年にロイエンベルクでホフマン展があり、"日本におけるホフマン"というテーマで話をしました。その時、孫のスザンヌさんに贈られた「赤ずきん」を見て驚きました。今まで見たことのない生き生きとした赤ずきんなのです。ホフマンさんが子どもや孫に贈った10冊の絵本の中でこの本だけが知られていません。この本をぜひ見てほしいと思い、『ヨッケリなしをとつといで』のように当館で出版しようかと思っただけです。^(注26)

と武井は述べている。スイス本国でも出されていなかったこの『赤ずきん』は、ホフマン生誕100年を記念し、福音館書店から2012年に出版されることとな

った。

数度の展覧会や出版物を通して、ホフマンの足跡と作品を多面的立体的に日本に紹介することができたことは、「小さな絵本美術館」の大きな功績であった。

わきこが絵本を描き始めて間もない頃、ホフマンと並んで好きだったのがハンス・フィッシャーだったという。「軽妙でスピードのある線と、えがかれている動物たちの、思わず頬に笑いが浮かんで来てしまうような愛らしい表情は、いままで見て来た絵本の中には無かったような気がした」(注27)と述べている。一方、武井は、20代に瀬田貞二の家で見せてもらったチューリヒ州の教科書に「淡い抱きしめたくくなるような美しい絵」があったのに感動し、また「生命を与えられたように踊る線で描かれた絵本『こねこのぴっち』、そして長ぐつをはいてしまったねこの情景が大好き」(注28)だったという。

「小さな絵本美術館」のもつフィッシャーの作品は200点以上あり、世界で最も数多くフィッシャーの肉筆作品を所蔵している美術館となった。しかし、ホフマンのときのように、当初はすんなりと話が進んだわけではなかった。

初めてホフマン夫人を訪ねて96年の2月にスイスに出向いたとき、スイス国立児童文学研究所をふたりは訪れている。そこで思いつき、フィッシャーの遺族の電話番号を教えてもらったという。ホフマン夫人宅からホテルに戻って、早速連絡してみると、フィッシャー夫人ピアンカが電話に出て、作品はすべて長男に任せてあると言われた。そこでまた、長男のカスパールに連絡をとったところ、その年の12月に開催されるフィッシャー展で会えることになった。ところが、展覧会場に着いてみると、すべての作品に値段が付けられていたという。そのときカスパールは芝居をやっていて資金を必要としており、さらには母のピアンカが病気で、治療費も捻出しなければならない状態であった。フィッシャーが好きで、日本で展覧会をしたいという話をしたが、それならば借りるのではなく作品を買って、それでやってくれと言われてしまう。こういう売り方をすれば、作品が散逸してしまうのだと話をしても、聞き入れてもらえ

なかったという。ふたりにはすべてを買い取るような資金はなく、数点を購入することしかできなかった。(注29)

しかし、そこから何度もカスパールに会いに訪れ、交渉を重ねていった。その結果、カスパールは父の作品を貸し出すことを承諾してくれたのだった。(フィッシャーの作品は、妻のピアンカ、長女ウルスラ、次女アンナ・バーバラにも分けられており、さらにアンナの所有作品は、彼女の死後4人の子ども達に分けられていた。そこで数年かけて、何度も遺族のもとに通い、現在残っている作品のほとんどを見ることが出来たという。)ようやく「小さな絵本美術館」でフィッシャー展を開催できたのは、3年越しの1999年であった。

以降もホフマン家と同様、フィッシャー家の人達との交流を重ね、信頼を得ていった。

その後展覧会をしてカタログを作ったり、『るんぶんぶん』の本を出したりして。やっぱり僕らが行くと、遺族がみんなチューリヒに集まってくれるわけ。奥さんも病院のある老人ホームに入ったんだけど、とにかく自分の持っているものは武井さんに最初に全部見せるから、欲しいのはそこから持って行って、って安く売ってくれた。(注30)

とある。夫人が亡くなったときには、遺品からふたりと一緒に映った写真が出てきて、その封筒に「マイフレンド」と書かれていたという。また、長女ウルスラも『たんじょうび』のなかで「リゼッテおばあちゃん」が座る椅子のモデルとなった実物を贈ってくれ、さらに『ブレーメンのおんがくたい』の手描き本を、ふたりの美術館にあるのが一番いいとって預けてくれた。武井夫妻がいかにフィッシャー一家の人たちに厚意と信頼を寄せられていたかがうかがわれる。

一方、「小さな絵本美術館」がフィッシャーに関わることによって、スイス本国でのフィッシャーへの認識が変わったようである。武井とわきこがスイスに通い始めた頃、フィッシャーが描いた壁画を見にコルブルン小学校を訪ねたが、どこにあるかわからないという返答で「フィッシャーの遺した芸術品が過去へと埋もれつつある状況に、寂しさを感じた」(注31)という。しかし、2000

年「スイスアルプスと絵本の旅」という美術館の企画で行ったときには、教育長、校長などがワインとお菓子つきの大歓迎で、現地の新聞にも掲載された。わきこは「自分達の認識のなさを反省し、海外から団体で見に来るようなすばらしい絵であるということを、再認識したということだったよう」(注32)と述べている。また、武井も「僕らがフィッシャーを追い続けることで、スイスでの認識もしだいに変わっていったのかもしれませんが。うれしいことですな。」(注33)と、スイス本国でフィッシャーが見直される契機になったことを喜んでいる。

フィッシャー展も何度か開催し、2008年のフィッシャー生誕100年を記念しての展覧会は、全国5か所を巡回することとなった。

エルンスト・クライドルフ

「小さな絵本美術館」では、スイスの絵本作家でもうひとり、エルンスト・クライドルフの展覧会も行っている。1863年ベルンに生まれたクライドルフは、草や花、昆虫などを精緻に写し取り、詩情豊かに表現した絵本作家で、19世紀から20世紀にかけてのヨーロッパにおける絵本開花期の先駆的存在のひとりであった。「絵本作家であるとともに編集者を兼ね、印刷にも精通していて、その工程のすべてを手がけることのできた、絵本作りの理想的な芸術家」(注34)と松居直が述べており、日本では福音館から『くさはらのこびと』が1970年に、『ふゆのはなし』が1971年に出版されていた。

武井がクライドルフの鮮やかな石版刷りの絵本と出会ったのは、瀬田貞二らと絵本の古書展で古本集めをしていた20代の頃であった。やがて「小さな絵本美術館」での展覧会のために何度もスイスに行き、古書店巡りもする中、そのたびにクライドルフはないか聞いていたという。1996年9月、ホフマン展のための絵を借りにスイスに行ったとき、顔なじみであったチューリヒの古本屋の女主人に教えられ、イッティンゲンで行われていたクライドルフ展に行くことができた。武井は「広い修道院の中に飾られた沢山の原画を目にしその美しさにしばし時を忘れ、いつかクライドルフの展覧会をしてみたい」(注35)と思

ったのであった。

原画の美しさに感動した武井がスイスのクライドルフ協会に入会したところ、初代会長のワルター・ロースリ氏が会員名簿に日本名を見つけ、珍しがって会いたいと申し入れて来たという。ロースリ氏はクライドルフの色々な作品を持っており、それらをふたりに見せてくれると同時に、クライドルフに関するさまざまな話も聞かせてくれた。この頃「小さな絵本美術館」では、ベルンの美術館からクライドルフの作品を借りて、2000年に展覧会を行う予定だったが、担当が代わり当初決めてあった借用料が上がってしまい、諦めざるをえない状況であった。しかし、2000年の「小さな絵本美術館」10周年の会のすぐあとに、ロースリ氏から次のような話があった。

私もクライドルフを個人的にたくさん集めてきましたが、武井さんの興味があれば、私の持っているものを、花のメルヘンの刷出しを含めて、シンボリックな値段で、譲ることを考えています。(略)ほかの美術館で、クライドルフの作品を集めたいところもあります。(略)私のコレクションの行き先は、心配しなくてもどこか見つかります。でも、妻と今回の話をして、もし武井さんに興味があれば、まず武井さんに、この話をしてみようということになりました。(注36)

そこで武井は12月にロースリ氏を訪れ、コレクションを見せてもらったが、それは原画、オリジナルリトグラフ、刷り出し等100点にも及ぶものだった。そして、その時ロースリ氏が提示した金額を見て、武井は目を疑ったという。なぜなら武井が思っていた金額の20分の1ほどであったからである。

武井には、スイスにある方がいいのではないかと、自分のところで責任が持てるかなどと逡巡もあったが、ロースリ氏が「クライドルフも日本の版画をみて影響を受けたと思う。クライドルフが日本にあってもいいのではないかと」(注37)と言ってくれたことで気持ちが楽になったという。この奇跡的ないきさつにより、念願だったクライドルフ展を2002年に行うことができた。ここでもふたりのクライドルフへの情熱が、ロースリ氏の信頼を勝ち得たのであった。

「小さな絵本美術館」の特色

海外の絵本作家の企画展は、ほかにもドイツの女性作家ビネッテ・シュレーダー展や、わきこがばばあちゃんの造形に影響を受けたという、チェコのヨゼフ・ラダの展覧会などもあり、見ごたえのある展示を行っている。

一方、日本の絵本作家については、まずは常設として、さとうわきこの「ばばあちゃん」や「せんたくかあちゃん」などの絵本原画を見ることができる。季節やテーマによってさまざまな原画が展示され、「小さな絵本美術館」の特別な魅力となっている。次に、わきこが絵本作家として40年以上のキャリアを持っていることで、多くの絵本作家や出版関係の人物とつながりがあり、これによってすぐれた絵本作家たちの展覧会が行われてきた。先述したスズキコージや片山健のほか、山脇百合子・瀬川康男・大道あや・堀内誠一・西村繁男・井上洋介・林明子・降矢なな・田島征三などの企画展を複数回開催し、丁寧に紹介している。

海外、国内を問わず、「小さな絵本美術館」の企画には、ふたりが好きで、自分たちが見たいと思う作品を取り上げてきた。(注38) 武井の審美眼にかない、創作者としての目を持つわきこが納得する作家を選んでいるがゆえに、大きな情熱をもって取り組むこともできたのであろう。時には思わぬ収穫を生み、作家や作品を最上の形で紹介する、豊かで充実した企画展となっている。武井は、

美術館とは直接顔の見える相手同士で、例えば美術館と美術館、美術館と作家といったつながりが大切でこの間にイベント会社のような者が入るのはあまり好ましくない。顔が見えないものが、ただ借りてきて展示しただけではその場限りの展示であり見ているものに深いものを感じさせることは出来ない気がする。(注39)

と書いており、ここには、美術館として、作家や作品と見る人をつなぐ責任を誠実に果たそうとする意志も感じられる。

また、自分たちが選んだ作家が時流からはずれていたり、過去のものとして忘れられそうになっても、だからこそいっそう、その存在を埋もれさせて

はならないという使命感も持っている。

たとえば、ヨシュア・レアンダー・ガンプの企画展の際に出された「びじゅつかんだより」には、武井の以下のような文章がある。「八ヶ岳館では、たぶん誰も知らないガンプさんの展覧会が始まりました。」^(注40)と。ほとんど無名の作家であっても企画展として取り上げ、さらに「小さな絵本美術館」発行で『Aとアドベントの光 アンナ・エリカのために』及び、ガンプの書いた絵による絵はがきの本『クッキー』を出しているのである。^(注41)「3番目の子どもが生まれる時クリスマスにかけて妻に贈ったアドベントの本」と「物のない時代子ども達に描いてあげた数知れないお菓子の絵」^(注42)には、父親としての深い愛情がこめられており、ふたりはそのあたたかく繊細な作品の魅力を見出し、残そうとしたのであった。『Aとアドベントの光』は手描きの1冊限定本であったが、「武井氏の希望により2003年初めてガンプ遺族からこのアドベント絵本の出版が許可された」^(注43)という。「小さな絵本美術館」がなければ、世に出ることはなかったかもしれない。

武井は「でもこれから先も、自分たちの好きな作品のみを展示し続けるのでいいのかという思いもあります。(略)今の子どもたちが手にとって喜んでいる作品には私にはわからないものも沢山あります。時が経ち年齢とともにわからない世界がふえてきているのかもしれないと思うのです」^(注44)と不安も述べているが、売れているような絵本の原画展を行うのはそれほど難しくはないだろう。柔軟に絵本の動向をとらえていくことも必要ではあろうが、すぐれたふたりの目で、隠れたすばらしい作品を見出し伝え続けてきたのが「小さな絵本美術館」であり、やはりそれを我々はこれからも期待したいと思うのである。

今年2017年は、八ヶ岳館ができて20年になる。どのような展示が計画されているか、楽しみに待ちたい。

〈注〉

- 注1 「絵本作家さとうわきこ研究～童話作家から絵本作家へ」（「信州豊南短期大学紀要」第32号）平成27年3月）
- 注2 武井利喜「八島太郎展によせて」（「小さな絵本美術館 びじゅつかんだより」1995秋）（以下「びじゅつかんだより」）
- 注3 「Interview 武井利喜さん」（「YUMEYUMECLUB Vol.3」ドリームネットワーク1997年5月）
- 注4 「インタビュー 好きなものを見せたい -『小さな絵本美術館』の活動」（聞き手 広松由希子 「絵本のためのBOOKEND 第2号」絵本学会2004年6月）
- 注5・6 注3に同じ
- 注7 「八島太郎展のこと」（「びじゅつかんだより」1995夏）
- 注8 注3に同じ
- 注9・10・11 注4に同じ
- 注12 架空社 1996年
- 注13 武井利喜「ハンガリーのナイーブアート展によせて」（「びじゅつかんだより」1994秋）
- 注14 武井利喜「ごあいさつ」（『ナイーブ・アート ハンガリーの民衆素朴画家たち』小さな絵本美術館 1995年）
- 注15 注13に同じ
- 注16・17 注2に同じ
- 注18 さとうわきこ「八島太郎展のこと」（「びじゅつかんだより」1994夏）
- 注19 「小さな美術館で、増えるものは夢と赤字です。現実には『ばばあちゃん』にささえられ、やっと成り立っている状況です」（「びじゅつかんだより」1993）といった記述や、八ヶ岳の敷地を購入するにあたって「今の赤字続きの美術館経営ではどのくらいの事ができるかは未知数です」（「びじゅつかんだより」1996夏）と述べており、厳しい運営状況の中での

開館であったことがうかがわれる。

注 20 注 3 に同じ

注 21 ホフマン展は 2012 年 7 月 20 日～8 月 26 日、フィッシャー展は 2013 年 7 月 13 日～8 月 25 日に行われた。

注 22 注 4 に同じ

注 23 さとうわきこ「ホフマンの絵に魅せられて」（「母の友」福音館書店 1999 年 2 月）

注 24 1998 年 4 月に刊行。

注 25 「美術館ではじめてのスイス旅行を企画して行ったスイスでのホフマン夫人のよみきかせ（ヨッケリなしをとっといで）を覚えている人は数人いると思う。」（さとうわきこ「思いでばかり」「びじゅつかんだより」2010 冬）との記載がある。

注 26 武井利喜「フェリクス・ホフマンと家族」（「あのねメール通信」Vol.128 福音館書店 2012 年 7 月 4 日）

注 27 「ハンス・フィッシャー展によせて」（『一メルヘンの国のマイスター—ハンス・フィッシャーの世界 生誕 100 年記念』小さな絵本美術館 2008 年）

注 28 「めぐりあい」（『一メルヘンの国のマイスター—ハンス・フィッシャーの世界』小さな絵本美術館 2001 年）

注 29・30 注 4 に同じ

注 31 武井利喜「フィッシャーを追い続けて」（「この本読んで！」2013 夏 第 47 号 出版文化産業振興財団）

注 32 「ハンス・フィッシャーを追いかけた 6 年」（注 28 に同じ）

注 33 注 31 に同じ

注 34 「時をこえた美しさ」（『エルンスト・クライドルフの世界 妖精の国のマイスター』小さな絵本美術館 2002 年）

注 35 武井利喜「あとがきにかえて」（注 34 に同じ）

- 注 36・37 武井利喜「11年目の美術館 報告1」(「びじゅつかんだより」2001早春)
- 注 38 武井は開館からの道のりを振り返り、「この25年、私達の好きな作品の原画展をずっと開催してきました」と述べている。(「びじゅつかんだより」2015春)
- 注 39 「びじゅつかんだより」2002春
- 注 40 「びじゅつかんだより」2004秋
- 注 41 とともに、小さな絵本美術館 2004年
- 注 42 注40に同じ
- 注 43 「解説」(ヨシュア・レアンダー・ガンプ『Aとアドベントの光 アンナ・エリカのために』小さな絵本美術館 2004年)
- 注 44 注38に同じ

*本稿をまとめるに際して、武井利喜館長、さとうわきこさん、またスタッフの金原さん、沖村さんには、インタビューや資料提供等、多大なるご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

小さな絵本美術館発行の本

ふりむけばねこ	井上洋介 架空社	1994
ナイーブ・アート ハンガリーの民衆素朴画家たち (図録)	架空社	1995
父から子への贈りもの—フェリクス・ホフマンの世界 (図録)		1996
ピネッテ・シュレーダーの世界 (図録)		1997
父から子への贈りもの—フェリクス・ホフマンの世界 絵本・版画・壁画・ステンドグラス	架空社	1998
フェリクス・ホフマンのカードブック	フェリクス・ホフマン画 架空社	1998
父から子への贈りもの—フェリクス・ホフマンの世界 絵本・版画・壁画・ステンドグラス	第2刷	1999
ハンス・フィッシャーの世界—メルヘンの国のマイスター— (図録)		1999
ヨッケリなしをとっといで—スイスのわらべうた (古詩)	フェリクス・ホフマン絵・ 岡志乃婦訳 架空社	2000
るんぶんぶん—昔話おとぎ話の行進	ハンス・フィッシャー作・ さとうわきこ言葉 架空社	2000
—メルヘンの国のマイスター— ハンス・フィッシャー の世界		2001
いたずらもの—グリム童話より	グリム作・ハンス・フィッ シャー絵・さとうわきこ訳	2001
エルンスト・クライドルフの世界—妖精の国のマイスター—	エルンスト・クライドルフ画	2002
Aとアドベントの光—アンナ・エリカのために—	ヨシュア・L・ガンブ作・ 岡志乃婦訳	2004
—kinderfreund—絵はがきのほん—クッキー	ヨシュア・L・ガンブ絵	2004
—メルヘンの国のマイスター—ハンス・フィッシャーの 世界—生誕100年記念		2008
いたずらもの—グリム童話より	グリム作・ハンス・フィッ シャー絵・さとうわきこ訳 第2刷	2009
ヨッケリなしをとっといで—スイスのわらべうた (古詩)	フェリクス・ホフマン絵・ 岡志乃婦訳 新版初版	2011
父からの贈りもの—フェリクス・ホフマンの世界—生誕 100年記念		2012
いたずらもの—グリム童話より	グリム作・ハンス・フィッ シャー絵・さとうわきこ訳 第3刷	2012
—メルヘンの国のマイスター—ハンス・フィッシャーの 世界—生誕100年記念	2008年版の第2刷	2016

小さな絵本美術館 企画展一覧

岡谷本館

1990年	11/3～12/23	北川民次絵本原画展「うさぎのみみはなぜながい」
1991年	3/20～4/22	スズキコージ絵本原画展「サルビルサ」
	4/26～5/26	さとうわきこ「春だとびだせばばあちゃん」
	5/28～6/26	山脇百合子絵本原画展「ぐりとぐらのえんそく」
	6/29～8/5	絵本集団「え？本ファーイ本・ヘンナ本」展
	8/8～9/23	片山健スズキコージ二人展「やまのかいしゃ」ほか
	9/28～11/4	瀬川康男「ふしぎなたけのこ」展
	11/7～12/20	クリスマス特集 林明子「サンタクロースとれいちゃん」山口みねやす「きらきらぼしのふるよるは」
1992年	3/20～4/20	野坂勇作「ふゆのあらし」展
	4/23～5/18	「乃宇点希の会」展覧会（瀬川康男・スズキコージ・さとうわきこ）
	5/21～6/22	おぼまこと絵本原画展「ふしぎサーカス」「モンスター・ムシューとめんどり」ほか
	6/25～7/20	伊藤秀男絵本原画展「じぞうぼん」ほか
	7/22～8/31	西村繁男絵本原画展「にちよういち」
	9/5～10/5	秋野玄左衛門絵本原画展「プンクマインチャ」
	10/8～11/3	井江春代絵本原画展「りんごの木の下でパチャママ」
	11/6～12/20	片山健絵本原画展「タンゲくん」「たのしいふゆごもり」
	12/2～12/20	「どうぶつとこどもたち」カレンダー展・1993 山脇百合子・西村繁男ほか
1993年	3/20～4/19	木葉井悦子絵本原画展「やまのかぜ」
	4/23～5/24	堀内誠一絵本原画展「くろうまブランキー」「太陽の木の枝」
	5/28～6/21	大道あや絵本原画展「あたこの浦」
	6/25～7/19	柿本幸造・富永秀夫絵本原画展「どんくまさんみなみのしまへ」ほか
	7/21～8/30	井上洋介絵本原画展「まがればまがりみち」「ふりむけばねこ」ほか
	9/4～10/4	斎藤隆夫絵本原画展「ガガガガ」「まほうつかいのでし」
	9/11～11/15	3周年特別展 武井武雄絵本原画展「とうもろこしどろぼう」ほか（新館ギャラリー）
	10/8～11/15	織茂恭子絵本原画展
	11/18～12/20	クリスマス・カレンダー展
1994年	3/12～4/25	大道あや展覧会 山脇百合子絵本原画展
	4/29～6/20	あべ弘士絵本原画展—絵ニマルズ☆アニマルズ—
	6/24～7/18	藪内正幸絵本原画展「しっぽのはたらき」

	7/20～8/31	林明子絵本原画展「あさえとちいさいもうと」「もりのかくれんぼう」 梶山俊夫絵本原画展「さんまいのおふだ」ほか
	9/3～10/31	片山健大展覧会「ほとんどぜんぶ展」 木葉井悦子絵本原画展「カボチャ ありがとう」ほか
	11/3～12/20	ハンガリーのナイーブ・アート展 瀬川康男「ちいさいひとたちの絵本」展
1995年	3/18～4/24	瀬川康男原画展「だれかがよんだ」「平家物語」 アニタ・ロベール展「ア ンナの赤いオーバー」他
	4/28～6/5	さとうわきこ絵本原画展『おつかい』から『ばばあちゃん』まで クヴィエタ・バツオウスカー展「まよなかごっこ」ほか
	6/9～7/17	高部晴市原画展「きんぎょのおつかい」ほか リスベート・ツヴェルガ ー展「アンデルセンコレクション」ほか
	7/20～9/4	長新太絵本原画展「おしゃべりなたまごやき」「かさをもっておむかえ」
	8/5～9/4	西村繁男絵本原画展「広島原爆」
	9/8～10/30	除染絵本原画展「ちょうちんまつり」 美術館所蔵展
	11/3～12/20	5周年特別企画 八島太郎展「あまがさ」「からすたろう」ほか
1996年	3/16～4/22	「スズキコージの世界」展「ガラスめだまときんのつこのヤギ」 「エンソくんきしゃにのる」ほか
	4/26～6/3	片山健絵本原画展「ココロさんのかかし」「カンナのにわで」ほか
	6/7～7/15	アジアの絵本作家展NO.2 シビル・ウェッタシン絵本原画展 「きつねのホイティ」ほか
	7/19～9/2	夏休み特集 みんなの絵本原画展 瀬川康男「ふたり」林明子「10まで かぞえられるこやぎ」さとうわきこ「どろんこおそうじ」ほか
	9/6～10/14	茂田井武絵本原画展「ねずみ花火」 美術館所蔵展
	10/18～12/20	スイスの愛 フェリクス・ホフマン展
1997年	3/1～4/21	姉崎一馬写真展「はるにれ」ほか モンヴェル「ジャンヌ・ダルク」展
	4/25～6/9	田島征三展「ふきまんぶく」「とべバツタ」「ちからたろう」「きんたろう」
	6/11～7/15	楽しい行進の絵本展 ハンス・フィッシャー 片山健
	7/18～9/1	初山滋展「たなばた」ほか さとうわきこ絵本原画展「せんたくかあちゃん」 ほか
	9/5～10/12	大道あや絵本原画展「ねこのごんごん」「花のうた」「さるくんごめんね」
	10/17～11/17	井江春代絵本原画展「一年代を追って」
	11/21～12/23	クリスマス展
1998年	2/28～4/20	佐々木マキ絵本美術館「ぼくがとぶ」「ぼくとねずみうみにもぐる」
	4/24～6/8	西巻茅子絵本原画展「わたしのワンピース」「えのすきなねこさん」ほか
	6/12～7/13	降矢なな絵本原画展「めっきらもつきらどおんどん」「おっきよちゃん とかつぱ」
	7/17～8/31	荒井良二絵本原画展「スースーとネルネル」ほか

	9/4～10/26	今森光彦写真展「スカラベ」ほか
	10/30～12/23	チェコの絵本作家 マヤ・ドゥシコバ絵本原画展
1999年	2/27～7/12	さとうわきこ絵本原画展Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期
	7/26～9/6	西村繁男絵本原画展「にちよういち」「がたごとがたごと」
	9/10～10/18	シンドラ・チャベック展
	10/22～12/23	フェリクス・ホフマン展
2000年	3/3～3/17	常設展
	3/18～7/16	林明子絵本原画展Ⅰ・Ⅱ
	7/20～9/10	飯野和好絵本原画展「ねぎぼうずのあさたろう・その1」ほか
	9/14～10/23	和田誠絵本原画展「ガクの絵本」「サニーサイドアップ」
	10/28～12/3	この10年の歩み展
	12/7～12/24	クリスマス展
2001年	3/17～6/3	スズキコージ展「エンソくんきしゃにのる」ほか
	6/7～7/16	「きりのなかのはりねずみ」原画展
	7/20～9/17	楽しいグロービー展
	9/21～11/19	片山健絵本原画展「きつねにようぼう」「カンナのにわで」「とくとくん」
	11/23～12/24	常設展
2002年	3/16～5/13	長谷川知子絵本原画展「りんごの花」「でっかいまめたろう」
	5/17～7/15	西村繁男絵本原画展「ピチクル ピチクルー花虫風月絵本一」「やこうれっしゃ」
	7/19～9/16	片山健 コッコさんの絵本展「コッコさんのあめふり」「コッコさんのおみせ」
	9/21～12/8	絵本「黄金時代の仲間たち」「ジャンヌ・ダルク」「うさぎのはる」ほか
	12/11～12/23	クリスマス展「ふゆのはなし」「ばばあちゃんのマフラー」ほか
2003年	3/21～5/19	降矢なな絵本原画展「あいうえおうた」「ともだちや」「おつきよちゃんとかっぱ」
	5/23～7/14	ヨゼフ・ラダ展「音楽家」「にげろやにげろ」ほか
	7/19～9/23	林明子絵本原画展「ぼくのぼんわたしのぼん」「おいていかないで」
	9/27～11/24	垂石眞子絵本原画展「月へミルクをとりにいったねこ」「もりのふゆじたく」ほか
	11/27～12/23	クリスマス展「マッチ売りの少女」ほか
2004年	3/20～5/24	ハンガリー・ナイブアート3人展
	5/28～7/12	収蔵品展「まいごのまめのつる」「たからげた」ほか
	7/17～9/13	さとうわきこおもしろ展覧会「おつかい」「あめふり」

	9/18～11/8	飯野和好絵本原画展「ねぎぼうずのあさたろう その2」「妖怪絵巻」ほか
	11/12～12/23	クリスマス展「マッチ売りの少女」「ばばあちゃんのマフラー」ほか
2005年	3/19～5/8	瀬川康男絵本原画展「ひな」「ひなとてんぐ」ほか
	5/14～7/11	チェコとスロバキアの絵本展—絵本芸術とポスターを中心に—
	7/16～9/12	さとうわきこ絵本原画展「ばばあちゃんとおべんとうつくろう」ほか
	9/16～11/6	井上洋介絵本原画展「くまの子ウーフ」ほか
	11/11～12/23	15周年展
2006年	3/18～5/7	グリムのおはなし さし絵展
	5/13～7/10	斎藤隆夫絵本原画展
	7/15～9/4	にしむらあつこ絵本原画展「ゆうびんやさんのホネホネさん」ほか
	9/9～10/30	片山健絵本原画展「おつきさまこっちむいて」ほか
	11/3～11/30	児島なおみ「クリスマスソングブック」原画展
2007年	3/24～5/14	さとうわきこ絵本原画展「おこのみやきつくろう」ほか
	5/19～7/16	さとうわきこ絵本原画展「くもりのちはれせんたくかあちゃん」ほか
	7/21～9/17	やまわきゆりこ展「やまわきゆりこのあかちゃん日記」ほか
	9/21～11/5	西村繁男絵本原画展「おふるやさん」「キータカ・スーイ」ほか
	11/10～12/20	ふゆのおはなし展「ふゆのはなし」「そりあそび」ほか
2008年	3/22～5/19	田中清代絵本原画展「おきにいり」「トマトさん」ほか
	5/24～7/14	五十嵐豊子絵本原画展「えんにち」「おみせ」ほか
	7/19～9/15	たかどのほうこ絵本原画展「まあちゃんのながいかみ」ほか
	9/20～11/30	ハンス・フィッシャー展 生誕100年記念「こねこのぴっち」「るんぶんぶん」ほか
	12/4～12/20	ハンス・フィッシャーの仕事展
2009年	3/28～5/10	井上洋介絵本原画展「アナボコえほん」「ちょうつがいの絵本」ほか
	5/16～7/13	エルンスト・クライドルフ展「ふゆのはなし」「くさはらのこびと」ほか
	7/18～9/14	所蔵品展 ハンス・フィッシャー ヨゼフ・ラダほか
	9/19～11/8	瀬川康男絵本原画展
	11/14～12/21	クリスマス展 さとうわきこ「きのいいサンタ」片山健「もりのてがみ」ほか
2010年	3/20～5/6	垂石眞子絵本原画展「月へミルクをとりにいったねこ」ほか
	5/16～7/12	ヨゼフ・ラダ展「民話絵本」「ふるさとの春」ほか
	7/17～9/20	「天使のお話」とこどもたち展
	工事により休館	

2011年	工事により休館	
2012年	3/31～5/28	さとうわきこ所蔵品展「いそがしいよる」ほか
	6/2～7/29	世界の絵本展「あめふり」
	8/1～11/19	野山で遊ぼう さとうわきこ「のいちごつみ」ほか
	11/22～12/26	クリスマスがやってくる展 さとうわきこ「きのいいサンタ」ほか
2013年	1/12～3/17	冬の企画展 さとうわきこ「そりあそび」シンドラ・チャペック「冬の女王」ほか
	3/23～6/2	さとうわきこ所蔵品展「あめのちゆうやけせんたくかあちゃん」
	6/7～7/15	にしむらあつこ「おしゃれなのんのんさん」原画展
	7/20～9/16	さとうわきこすずしいこかげ「ちょっといれて」展
	9/21～12/1	ハンス・フィッシャー展「ブレーメンのおんがくたい」から「こねこのびっち」まで
	11/22～12/25	クリスマスがやってくる展 さとうわきこ「きのいいサンタ」アニタ・ロペール「クリスマスイブのこと」ほか
2014年	3/21～4/12	所蔵品展 織茂恭子「まいごのまめのつる」ほか
	4/19～6/1	ピネッテ・シュレーダーの世界「アーチ・ポルドのほったた」「美女と野獣」ほか
	6/7～6/29	小さな絵本美術館の仲間たち さとうわきこ「あめふり」スズキコージ「やまねこぼうや」ほか
	7/5～9/15	さとうあきら写真展 動物の顔・みんなの顔
	9/20～11/30	お月さまの絵本展「いそがしいよる」「おつきさまこっちむいて」ほか
	11/22～12/25	クリスマスがやってくる展 さとうわきこ「きのいいサンタ」アニタ・ロペール「クリスマスイブのこと」ほか
2015年	3/21～5/29	のいちごつみ展 「のいちごつみ」「ちょっといれて」ほか
	5/30～7/12	浦中こういち展「キャベツをもって」ほか
	7/18～9/27	かつらこ展「かっぱたろうとさかなぶえ」
	11/26～1/11	さとうわきこの世界展—ばばあちゃんとたのしい仲間たち
2016年	3/19～	さとうわきこ展「たいへんなひるね」「るすばん」「ちいさいねずみ」ほか
	4/23～7/2	追悼・井上洋介「ふりむけばねこ」展 さとうわきこ絵本原画展「たいへんなひるね」「あめふり」
	7/9～9/4	片山健「おばあさんの青い空」展
	9/10～11/14	沢田としき「ちきゅうのうえで」展
	11/19～1/9	水沢決「まっちうり」「しあわせのおうじ」展

八ヶ岳館

1997年	7/12～9/8	小さな絵本美術館おなじみの絵本作家展 瀬川康男・井上洋介ほか
	9/12～12/7	ビネッテ・シュレーダー展
1998年	3/20～5/25	丸木スマ・大道あや親子展
	5/29～7/13	スズキコージ展 タブロー画を中心に、立体作品等
	7/17～9/7	西村繁男絵本原画展「おふろやさん」「広島原爆」他 乃宇点希の会展
	9/11～12/6	フェリクス・ホフマン展～父から子への贈りもの～ 「おおかみと七ひきのこやぎ」ほか
1999年	3/20～7/12	片山健絵本原画散歩前期 後期
	7/16～9/19	今森光彦写真展一大自然と小さな生命の旅ー
	9/23～12/5	ハンス・フィッシャー展「ブレーメンのおんがくたい」「こねこのびっち」ほか
2000年	3/18～7/16	林明子絵本原画展Ⅰ・Ⅱ
	7/20～9/18	田島征三・田島燃 二人展
	9/22～12/10	さとうわきこ絵本原画展「せんたくかあちゃん」「おつかい」ほか
2001年	3/17～5/21	川端誠展「わたしのまっかなバスケット」「びかびかぶつん」ほか
	5/25～7/16	井上洋介絵本原画展「まがればまがりみち」「ふりむけばねこ」ほか
	7/20～9/17	やまわきゆりこ絵本原画展「ぐりとぐらとすみれちゃん」ほか
	9/21～11/19	藪内正幸の世界 前期・後期
	11/23～12/9	常設展
2002年	3/21～4/15	所蔵品展
	4/19～7/8	フェリクス・ホフマン展「ねむりひめ」「グリムの童話」ほか
	7/21～9/16	ハンス・フィッシャー展「長ぐつをはいたねこ」「いたずらもの」ほか
	9/21～12/8	エルンスト・クライドルフ展「花のメルヘン」「くさはらのこびと」
2003年	3/21～4/21	所蔵品展「春のつかい」「花のメルヘン」ほか
	4/26～7/14	瀬川康男むかしばなしの絵展「はなさかじい」「さるかに」ほか
	6月中	ピーターラビットの古書展
	7/19～9/23	林明子絵本原画展 前期 後期
	9/27～12/7	西村繁男絵本原画展「やこうれっしゃ」「おふろやさん」ほか
2004年	3/20～4/19	所蔵品展「ふたり」「たからげた」ほか
	4/24～7/12	沢田としき絵本原画展「アフリカの音」「土のふえ」ほか
	7/17～9/13	ほりうちせいいち絵本原画展「ぐるんぱのようちえん」「こすずめのぼうけん」ほか
	9/18～11/29	ヨシュア・レアンダー・ガンブと同時代（フライホルト、クライドルフ）展

2005年	3/19～5/8	アンソニー・ブラウン絵本原画展「おんぶはこりごり」ほか
	5/14～7/11	スズキコージ原画展「ゆきむすめ」「エンソくんきしゃにのる」ほか
	7/16～9/12	片山健絵本原画展「ゆうちゃんのみきさーしゃ」ほか
	9/17～11/28	神沢利子のアトリエから—絵本は創るのも見るのも楽しい—「ちびっこカムのぼうけん」ほか
2006年	3/18～5/7	さとうわきこ絵本原画展「おりょうりとうさん」「ちょっといれて」ほか
	5/13～7/10	「こんな絵本があったとさ」展「うさぎのはる」「ジャンヌ・ダルク」ほか
	7/15～9/4	降矢なな絵本原画展「めっきらもつきらどおんどん」ほか
	9/9～10/30	梶山俊夫展「かぜのおまつり」「だごだごころころ」ほか
	11/3～12/3	田島征三・田島燃 2人展「はたけのカーニバル」「ひとのいいネコ」ほか
2007年	3/24～5/14	こいでやすこ展「はるです はるのおおそうじ」「たろうめいじんのたからもの」ほか
	5/19～7/16	世界の昔ばなし絵本原画展「チャマコとみつあみのうま」「カエルのおよめさん」ほか
	7/21～10/1	父から子への贈りもの フェリクス・ホフマン展「おおかみと七ひきのこやぎ」ほか
	10/5～12/2	たるいしまこ絵本原画展「月へミルクをとりにいったねこ」「きのみのケーキ」ほか
2008年	3/22～5/19	出久根育絵本原画展「おふろ」「アントン・ベリーのながいたび」ほか
	5/24～7/14	スズキコージ展
	7/19～9/15	いろいろかがくのえほん展 薮内正幸「くちばし」片山健「ぼくからみると」ほか
	9/20～11/30	ハンス・フィッシャー展 生誕100年展「プレーメンのおんがくたい」ほか
2009年	3/28～5/10	さとうわきこ絵本原画展 ばばあちゃんシリーズほか
	5/16～7/13	片山健油彩画展「わたしがおひさまだったら」「きつねによぼう」ほか
	7/18～9/14	川端誠絵本原画展「鳥の島」「森の木」「うんこ日記」ほか
	9/19～11/30	北田卓史絵本原画展「山ねこおことわり」「ぼくねじだいすき」ほか
2010年	3/20～5/6	西村繁男・いまきみち・にしむらあつこ3人展
	5/14～7/12	エルンスト・クライドルフ絵本原画展「花のメルヘン」「バツさんのきせつ」ほか
	7/17～9/12	さとうわきこことどもたち展
	9/18～11/29	小さな絵本美術館開館20周年記念 20年のなかまたち 片山健「おつきさま こっちむいて」スズキコージ「やまねこぼうや」ほか
2011年	4/1～5/29	生誕100年記念 フェリクス・ホフマン展 -前期-

	6/3～7/18	沢田としき絵本原画展
	7/23～9/4	降矢なな絵本原画展「きょだいなきょだいな」「ナミチカのきのこがり」ほか
	9/10～11/28	生誕100年記念 フェリクス・ホフマン展 ー後期ー
2012年	4/1～5/28	田島征三・田島燃 2人展
	6/2～7/16	さとうわかこ絵本原画展「うみのおまつりどんどとせ」ほか
	7/21～9/17	わくわくどきどき しぜんと遊び 片山健「ほくからみると」西村繁男「ターくんのちいさないけ」ほか
	9/22～12/2	スズキコージ展「かれはふるふる ゆきがふる」ほか
2013年	4/13～6/2	井上洋介展「おだんごぼん」「まがればまがりみち」「アナボコえほん」ほか
	6/8～7/15	フェリクス・ホフマン展「ねむりひめ」「うできき四人きょうだい」ほか
	7/20～9/16	片山健絵本原画展 片山令子文による「たのしいふゆごもり」ほか
	9/21～12/1	ハンス・フィッシャー展「ブレーメンのおんがくたい」「いたずらもの」ほか
2014年	4/19～6/1	ピネッテ・シュレーダーの世界「お友だちのほしかったルピナスさん」「わにくん」ほか
	6/7～6/29	小さな絵本美術館の仲間たち ハンス・フィッシャー「こねこのびっち」片山健「えんそく」ほか
	7/5～9/7	久保田弘信写真展 戦渦のこどもたち
	9/20～11/30	児島なおみ展「どろぼう夫婦」「うたうしじみ」ほか
2015年	4/18～7/12	エルンスト・クライドルフ絵本原画展「春のつかい」「くさはらのこびと」ほか
	7/18～9/13	降矢洋子・降矢なな・アンヴィル奈宝子 三人展
	9/19～11/30	堀内誠一展 革新的アートディレクターが描いた絵本の世界
2016年	4/23～6/26	ヨゼフ・ラダとチェコの絵本展
	7/2～9/11	ふしぎの国のスズキコージ展「注文の多い料理店」「ブラッキンダー」ほか
	9/17～12/4	生誕100年子どもの文学の世界を切り拓いた瀬田貞二展ーここに響くことばー